



	INF	REF	こども	電話	メール	中央計	行徳	BM	南行	信篤	平田	駅南	全館計
6月	861	448	490	164	2	1,965	773	59	178	248	102	530	3,855
累計	2,432	1,353	1,399	327	11	5,522	2,117	180	495	746	274	1,415	10,749

INF:インフォメーション・カウンタ REF:レファレンス・カウンタ BM:自動車図書館

🔍 今月のレファレンス記録票から

分類

質問と内容

I/B1 市川市柏井町 3 丁目の浜道とはどこか。どんな人物が通っていたか等を知りたい。

『ゼンリン住宅地図千葉県市川市 1』(ゼンリン 2023) p.54 によると柏井町 3 丁目には大柏川にかかる「浜道橋」がある。『市川市字名集覧』(市川市教育委員会 1973) によると、柏井町 3 丁目 91~104 の字が「浜道」(p.29・図 12)となる。『市川の道をたずねて』(市川博物館友の会歴史部会 2005) p.32~34 に「浜道」(森亘男／[著])が掲載されており、『更級日記』の菅原孝標の女が通ったという説や、平将門、源頼朝が通ったという伝説のほか、『成田参詣記』『葛飾誌略』から、日蓮上人が通ったとの説の紹介がある。菅原孝標の女については、『市川 市民読本』(改訂版 市川市教育委員会 1979) p.284、頼朝の伝説に関しては、『市川の伝承民話』(市川市教育委員会 1992) p.94~95 にも記載あり。

213.6 神田山の開削はなぜ行われたのか。土は日比谷入江の埋立、柳原堤築造に使われたというが、資料を知りたい。(『「水」が教えてくれる東京の微地形の秘密』(実業之日本社 2019)、『地図と愉しむ東京歴史散歩 地形篇』(中央公論新社 2013) は見たとのこと。)

神田山は現在の駿河台のあたり。『日本歴史地名大系 13』(平凡社 2002) p.160「駿河台」の項に「江戸城の東にある丘陵。北側に神田川が流れ当初は神田山・神田台とよばれていた」とある。

『江戸の都市計画』(鈴木理生／著 筑摩書房 2024) では、江戸建設は「最初から大江戸の姿を目指したのではなく、その時々必要をみたすために、まず最小限の工事が行なわれ、その結果が熟して新しい必要性が生まれたときに、また建設が追加されるという形のものだった。」(p.177)と解説する。日比谷入江埋立は沖積地不足の解決と、敵船からの防衛のためとし (p.186)、御茶ノ水の掘割りの目的は、平川・小石川の洪水から城と中心市街地を守るため、揚土は水害を防ぐ土手に利用され、柳原の土手の記述もある (p.190)。p.223 には、陸地化の土は大部分が江戸築城のさいの「残土」だったとある。同著者の『江戸の川・東京の川』(日本放送出版協会 1978) には、日比谷入江の埋立は、防衛上の配慮と同時に大名・旗本の宅地造成を兼ねたものとあり (p.119~121)、「低地改良工事は(中略)神田山を掘り崩した土で埋め立てた」(p.123)とある。

『徳川四代大江戸を建てる! 驚きの江戸の町づくり』(実業之日本社 2017) p.92~には、日比谷入江の埋立理由として、宅地等の造成、海防上の理由とともに、堀の開削等で溜まる膨大な残土処理を挙げている。しかし残土だけでは足りず神田山の切り崩したとされ、天下普請について解説している。ほかに、『江戸学事典』(西山松之助／[ほか] 編集 弘文堂 1994) p.97 に、「豊島洲崎の海面を埋立てさせて町地を造成した。このとき神田山を掘り崩した土砂が埋立てに用いられた。」として三浦浄心の『慶長見聞集』の文を引用している。

『江戸の町 上』(内藤昌／著 草思社 2010) では、「四神相応」の原理による都市計画、「の」の字型拡張計画の中での神田山の切り崩し、日比谷入江埋立、平川の流を浅草川に付替える工事の記述がある(p.42)一方、『地形で見る江戸・東京発展史』(鈴木浩三／著 筑摩書房 2022) では、その説を否定し、「江戸の城づくり・都市づくりの基本は、地形との関係から導くことができる」(p.86)として、城の整備と一体的に日比谷入江が埋立てられ、西丸の濠工事のほか、江戸城本体の工事で生ずる残土や、神田山を崩した土砂も埋立てに使われたとしている (p.54)。洪水対策としての駿河台の掘割開削や水害対策として築かれた柳原土手についても記載あり。

382.1 江戸時代の庶民がアザラシをどう捉えていたのか。「縁起の良い魚」(万歳楽) ともてはやしたり畏れたりしたと聞いたが、当時の記録があれば、教えて欲しい。

天保4(1833)年に尾張愛知郡熱田前新田の海で捕らえられたゴマフアザラシについての記録が複数ある。『彩色江戸博物学集成』(平凡社 1994) p.364,366 に大窪昌章「海獣図」として、見世物として公開され、外国書によって同定し、体測体重、形態、生態の知見を付し、銅版画を作成した等の記載があるほか、同図の写が、国立国会図書館 NDL ギャラリー「描かれた動物・植物—江戸時代の博物誌—」<https://ndlsearch.ndl.go.jp/gallery/nature/31> (11/21 確認)に掲載されている。『動物奇想天外 江戸の動物百態』(内山淳一／著 青幻舎 2008) p.85 には、「又兵衛新之田前新開二入込候海獣ノ記」がある。また、「(天保四巳日記) 海獺談話図会」が西尾市岩瀬文庫の Web サイトで閲覧でき、海獣を見ようと見物人が集まる様子など当時の雰囲気分かる。<https://iwasebunko.jp/stock/collection/entry-231.html> (11/21 確認)

「万歳楽」については、「月堂見聞集」(『日本随筆大成 続 別巻 2 近世風俗見聞集』吉川弘文館 1981 p.294) に正徳2(1712)年、江戸深川に流れ着いた長さ7尺、鼠色、毛の長さ7寸、頭鼠のごとし…という生き物が「万歳楽」と名付けられたとある。

382.1 江戸時代の本草学や蘭学、北方との交易・見聞の中にアザラシについて書かれた資料がないか。

アザラシの記載がある江戸時代の資料としては、本草学等の博物学的視点のものと、蝦夷の旅行記等で名産として記載されているものがある。当館で確認のとれたものは以下のとおり。

『本朝食鑑 5』(人見必大／[著] 平凡社 1981) p.328,362、『本草綱目啓蒙 4』(小野蘭山／著 平凡社 1992) p.66,91、『毛吹草』([松江重頼／編] 岩波書店 1976) p.176、「蝦夷島記」(『続々群書類従 第9』続群書類従完成会 1978) p.526、「日本山海名産図会」(『日本庶民生活史料集成 第10巻』宮本常一／[ほか] 編 三一書房 1970) p.69~70、『日本庶民生活史料集成 第28巻 和漢三才図会』([寺島良安／著] 三一書房 1980) p.545、「東遊雑記」(『日本庶民生活史料集成 第3巻』竹内利美／[ほか] 編 三一書房 1969) p.529,p.538、「蝦夷談筆記」(『日本庶民生活史料集成 第4巻』高倉新一郎／編 三一書房 1969) p.392,400、「東遊記」同 p.430、「夷諺俗話」同 p.494,515。

以下は Web サイトで確認できる。「大和本草 巻16 獣類 17 海豹」(国立国会図書館デジタルコレクション・インターネット公開) <https://dl.ndl.go.jp/pid/2557477/1/17> (11/21 確認)、『知床日誌 (戊午)』より「水豹」、『蝦夷国風図絵』より「あざらし取」(北海道大学附属図書館の2020年度資料展示「北の動物たち・描かれた海獣」の Web サイト)

<https://www.lib.hokudai.ac.jp/northern-studies/digital-exhibitions/2020/#seal3> (11/21 確認)、「賀来飛霞動物写生図 海獣図 アザラシ」(文化遺産オンライン)

<https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/546121> (11/21 確認)

ほかに、北海道のアザラシの皮に関する資料として、『日本いきもの小百科 名前で読み解く』(平田剛士／著 平凡社 2012) p.33~35 に、ゼニガタアザラシの銭形模様を鼈甲になぞらえた江戸期の和人に珍重され、乱獲により激減したことや、幕末の旅行家、松浦武四郎が残した「知床日誌」に記載があること等が書かれている。

他にもこんな質問ありました (クイック・レファレンスから)

分類

質問

⇒ 回答、補足事項、蘊蓄など

576.4 和ろうそくの蠟は何か ⇒ 『和ろうそくの世界』(大石孔／[ほか] 著 文芸社 2002) p.29~31 にハゼの木の実から作る「木ろう」について記載があり、他の植物性のろうについても紹介あり。『キャンドルを楽しむ』(講談社 1986) p.107 には、室町後期には、ウルシ、ハゼの実、ヌルデ、ヤブニッケイ等の植物から採取した「木ろう」で和ろうそくが作られるようになったとある。

750.2 和傘に塗る油は何か ⇒ 『匠の姿 Vol.4』(出山健示／文 二玄社 1999) p.109 に渋柿を2回塗り、その上から黄土を混ぜた亜麻仁油を塗るとある。『傘 和傘・パラソル・アンブレラ』(LIXIL 出版 2016) p.74 には「えごま油を中心とした植物油の混合油を塗る。」とある。一般社団法人日本植物油協会の Web サイト「竹と和紙と植物油が織りなす和傘の世界」のページには、「荏油(えのあぶら)、亜麻仁油、桐油に、紙に油を浸透しやすくするために少量の鉱物油を混合して使用」とある。<https://www.oil.or.jp/trivia/wagasa.html> (11/21 確認)